

エドウィン・ダンの生涯

赤木駿介



エドウィン・ダンの生涯

赤木駿介



講談社

エドウィン・ダンの生涯

著者—赤木駿介

一九八四年八月一五日 第一刷発行

ブックデザイン—井上正篤

発行者—加藤勝久

発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二—二一 郵便番号一一二 電話 東京〇三(九四五)一一一—大代表 振替 東京八一三九三〇

印刷所—豊国印刷株式会社

製本所—黒柳製本株式会社

定価—一三〇〇円

落丁本・乱丁本は、御面倒ですが、小社書籍製作部宛にお送り下さい。送料小社負担にてお取り替えます。

© SHUNSUKE AKAGI 1984 Printed in Japan



エドウィン・ダンの生涯

第一章

その一

シカゴは、新緑を包むような五月の夕暮れであった。

一八七三（明治六）年の初夏、エドウィン・ダンは、ストックヤード・ホテルのロビーから窓の外を眺めていた。なにか心に訴えるものがあり、瞬時、人の近づく気配が判らなかつた。声をかけられてわれに返つた。

「エディー、だいぶ待たせたかな」

アルバート・ケブロンが、手をさしだしていた。

「いえ、ぼくが早く来すぎました」

ダンは、あわててソファアールから立ち上がった。アルバートもかなり大柄のほうだが、ダンはさらに長身である。

「約束の時間よりも早く来るといふことは、非常にいいことだ」

アルバートはそんな言い方をし、それからぐるりとロビーを見回した。

「どうだろう、このホテルは……。新しくなつて前のような落着きがなくなつたではないか。むかしはよかった。が、まあいい、今晚はゆっくりと食事をしよう。その前に、まずバーボンで家畜たちの前途を祝すことにしようではないか」

むかしはよかったなどと言うが、アルバートは、まだ三十の半ばである。

ダンは、このホテルの新しいロビーが気に入った。活気にあふれている再興の町の象徴のように思えるのである。全米は不況下にあったが、この町の熱気は、二十四歳の若いダンを刺激した。

オハイオのスプリングフィールドの牧場での毎日は、どこかに自分のすべてをぶつけられないものがあった。従姉妹のグレイスに失恋したためだけでない空虚な部分が、ダンの心の中にある。それがなんであるのか判らなかった。ただ、こうしてシカゴの空気に触れていると、なぜか気分が昂揚してくる。

一年半前の一八七一年十月八日の夜、一頭の牛がランプを蹴飛ばした。そのときから三日間、シカゴは未曾有の大火に見舞われた。死者二百五十人、九万八千五百人が焼け出され、一万七千四百五十の建物が焼失、破壊した。

シカゴは、市街の半分近くを失い、推定二億ドルという損害をこうむったが、いま全米不況のさ中で、遅^たく復興しつつある。

戸外は、間もなく夜に入ろうとしていたが、閉め切られた窓を通してまで、若葉の匂いが入ってくるようであった。

ダンは、五年前の十八歳のとき、オハイオ州オックスフォードのマイアミ大学を中退した。長兄ジェームスが、どうしても土木技師になると言って家を飛び出してしまったためであるが、ダンも父たちのもとで働くことになったことをむしろ喜んだ。法律家を目指して入学したもの、どこか自分にそぐわないものをいつも感じていたからだ。自分の学問は、机の上やオフィスの中にはない。土にこそ、自分の求めているものがあるのかもしれない。家族たちは、ダンがあまりにもあっさりと家に帰って来たので、かえっておどろいた。

ダンはいさよから、何かを思い立つと、急にそれを実行するところがあった。はた目には、軽

率とも思えた。だいたいこのころのアメリカ人には、その大小があつてもだれにも、そうした気質は強かつた。

そんなダンと、家族は理解してくれたが、陰では、エディーの病氣ひやまと言ひ、それを聞き知つたダンンは、真面目な顔で、エディーの閃ひらめきと訂正した。

「何を考へているのだね」

アルバートは、とがめるように言つた。

「いえ、ちよつと……」

「エディー、きみは夕暮れが好きかね」

「は、はい……。ぼくは、一日のどれも好きです」

「ほう。わたしはね、夜は好きだが、その前の夕暮れは好かん。もつとも夜が好きになつたのもごく最近のことだ」

ダンンは黙つていた。

「落日は哀れだ」

この元北軍大佐は、何かを思い出したようだ。

「その日の終わりだからな」

そうだろうか、ダンンは思う。一つの国で沈んだ太陽は、また別の新しい国を照らして昇つてい

る。
「さて、わたしの家畜たちはその後も元氣だらうね」

「もちろんです、ケブロンさん。長旅にも耐えられるでしょう」

「そうあつて欲しいな。では、彼らの前途を祝して、まず乾杯！」

ダンンは目元をゆるませ、無言でグラスを捧げたが、このとき、家畜たちの前途ではなく、自分の運

命が大きく変ろうなどということは、夢にも思わなかった。

数日前、いまは家畜商になつてゐるこのアルバートが牧場にやつて来た。

日本に行つてゐるアルバートの父ホーレス・ケブロンからの依頼で、ショートホーン牛を数十頭買入れるためである。ダンと二人で、良質のそれを八十頭選んだ。

——契約書を作つておく。三日後、シカゴのストックヤード・ホテルで会おう。
アルバートは一方的にそういうと帰つて行つた。

アルバートの父ホーレス・ケブロンは、一八六七年から二年前の七一年まで、第十七代大統領ジョンソンと、第十八代大統領グラントの元で、農商務局長（大臣格）をしてゐた。

一八七一年の春に、日本から開拓次官黒田清隆が来た。日本の新政府は、北海道の開発、開拓に必要な人材を求めていた。黒田は、在米中の少弁務使（公使格）森有礼とはかり、現職中のホーレス・ケブロンに、最高顧問として来日することを依頼し、グラント大統領も同意して実現した……。

アルバートは彼の次男だが、南北戦争中に病氣になり、退官して家畜商になつてゐた。長男のホーレス・ケブロン・ジュニアは、チェロキー族インディアンとの戦いで死んだ。

——あれが商人の態度かね。おれはおどろいたですよ。

忠僕トム爺さんは、胸をそらして帰つて行くアルバートの背に、ぶつぶつと呟いた。

——いいじゃないかトム。

——ダンは肩を叩いた。

——なんでもかんでも、いまは、北軍の世の中だからね。

トムは、顔をゆがめた。

このトムによれば、南北戦争で南軍のリー將軍をやぶつた北軍のグラント將軍も、代將で退官したケブロンも、大佐だつたアルバートも、みんな戦争屋であつて、政治家や商人ではない。

——それで、あの牛たちは、地図にない国へ行くんかね。

あるとき、トムはあらためて牛たちの方に目をやったものである。

「日本という国は遠い……」

アルバートは歌うように言うのと、テーブルの上に契約書を出した。

「サインしたまえ。それから、ついでだから日本のことについて、父からの便りで知ったことを話そう」

「その前に一つだけお聞きしたいことがあるのですが、いいですか、ケブロンさん」

ダンは、アルバートの堂々たる経歴と押出しに、ともすると圧倒されそうであった。過日の話し合いにも、いまこの目の前にある契約書にも、少しも怪しいところはない。ただ、一つだけはっきりしない点があった。それを確かめたかった。

「なんだね、言ってみたまえ」

「家畜たちの輸送のことです」

「サンフランシスコまでのことかね、それとも、日本までのことかね」

ダンは心中で、えっ、と叫んだ。日本までのことなど念頭になかった。ましてサンフランシスコまでも思っていないかった。せいぜい、オマハか、デンバーまでと考えていた。数日前のトムの言葉が、ダンに現実を忘れさせた。

地図にない国とはトムの冗談だが、日本という、まるで夢の中の国のことは、すぐに忘れてしまっていた。

「今度の火曜日に、カナダへ注文しておいた二十頭の乳牛と、百頭のサウスダウン種の羊がここに着く。きみのところの牛と合わせて二百頭だが、カナダから付いて来る男も、サンフランシスコまでは手伝うだろう」

アルバートは、巧妙であつた。肝腎かんじんなことはなかなか言わない。

「つまり、ぼくも、サンフランシスコまで手伝わなければならぬ、ということでしょうか」

そう言つてしまつてから、ダンは、しまった、と思つた。アルバートは、パチンと指を鳴らした。

「きみは、じつにさつしのいい青年だ。その通りだよ、エディー」

ダンも微笑した。おれは、いつもこうだ。掛け引きとかいう手順が、本質的にできないらしい。考えたことは、すぐに言葉になつたり、行動になつたりする。

（そういうお前を、わしは嫌いではない）

父は、小さいときから、後悔しそふになつてしよげている自分に、必ず、そう言つて勇気づけてくれたものである。

ダンはいつところからか、こうしたあと、微笑するようになっていた。

「来週らいしゅうの金曜きんようごろに出発できるよう、貨車のほうの手筈てはずはととのえておこう、そう、十四台は必要だろうな」

十四台の貨車、二百頭の家畜たち……。ミズリーから西は、いまだにアメリカ大沙漠と信じられてゐる不毛の地が横たわり、さらに峻烈なロッキーマウンテンとシエラネバダの二つの山脈やまなみが大きく立ちはだかる。

アルバートは、そんなダンの氣持ちを読んだのか、

「ステージ・コーチの時代は終つたよ」

と言つて高笑した。

一八六九年五月十日、大西洋側のユニオン・パシフィック鉄道と、太平洋側のセントラル・パシフィック鉄道が、ソルトレーク湖北岸のプリモントリーでつながつた。

「ええ、それは知つてます、しかし……」

「しかし、なんだね。まさか、ジェームズ兄弟のばかげた列車強盗の噂を、きみは恐れているわけではないだろう？」

アルバートは、腹立たしそうな表情で、くつとあごを上にとすると、勢いよくバーボンを流し込んだ。

アルバートは噂と言ったが、フランク・ジェームズ、ジェシー・ジェームズ兄弟らが、銀行や列車を襲っているのは事実である。七年前の一八六六年からで、ジェームズ・ギャング団は、その後一八八二年まで、史上に名高い襲撃をくり返す。

「冗談じゃありません。牛や羊を、彼らが襲いますか」

ダンは、少し勢い込んで答えたが、

「それじゃあ、きみは、なにを恐れているのだ？」

そう言われると、すぐには返事ができなかった。

予感がする。体内に、なにか恐れていることがひそんでいる。しかしそれがなんであるのか、はっきりとした形を示してこない。強いて言えば、まだ三年しか経っていない鉄道に対する、漠然とした不安かもしれない。けれどもこのことを口にするわけにはいかないのだ。いま、目の前にいる人物は、家畜商といっても、あくまで元軍人であり、仲買人である。生きている動物たち二百頭を連れての、貨車による長途の旅の危険と困難を、はたしてどのくらい感じることができようか。

「すると、残るは一つだ」

アルバートは、じっとダンの目を見た。

「なんですか、それは？」

ダンは、負けずにその目を見返した。

「インディアン」

大きな声であつた。ロビー中の顔が動いた。

ダンは、そんな、といいかけてその言葉を、ゆっくりとバーボンとともにのどに流し込んだ。

その二

爽やかな朝であつた。

ダン は 早起きである。アルバートがドアを叩いたとき、いつものように、ひげの手入れはすんでいた。

「どうぞ、入ってください」

「いや、ロビーで待っている。熱いコーヒーが飲みたい」
アルバートは、声を残して去って行った。

ダンは、窓をいっばいに開いて外に向かった。新鮮な空気が、体のすみずみにまで送り込まれてくる。昨日までの古い血がすでに新しい血となつて、また活力があふれる。

馬や牛たちの朝がそうだ。とくに、皮膚の薄い、つややかなサラブレッド種は、きれいに血管を浮き上がらせ、朝露の上を弾んで走って行く。

叔父のワルターは、このサラブレッド種に魅了されていた。

——エディー、見ろ、すばらしいじゃないか。

なにかというと、ワルターは、この言葉を使った。ダンは、ワルターの競走馬の背中に、最近ワシントンが紙（ドル紙幣）になつて乗っていることを知っていたが、それは言わないことにしていた。

叔父のすばらしいという表現は、たしかにその通りである。が、ダンには、ついていけない面があつた。といつて、金銭を不浄なものと思つてゐるわけではなかつた。ワルターが、自分の信念で、ある血統の馬とある血統の馬とを交配させ、そして生まれた仔馬を飼育し、調教し、ある仔馬は市場に

出し、ある仔馬は自分の手元で、もっと調教させてレースに出場させる行為は、どこにも間違いはないと思う。

叔父の牧場での二年間は、ダンに、かけがえのない経験と知識を与えてくれたし、サラブレッド種に、愛情と尊敬をいだかずにはいられなかった。また彼らは、たしかに美しくて、すばらしい動物たちであった。何回か連れて行かれた競馬場の空気にもなじめた。

それにもかかわらず、ダンがそのまま叔父の牧場にとどまらず、競走馬の世界から離れていったのは、もっと広い世界に漠然とした方向を求めていたからである。

——それっ、ボブウーリイ、もう少し粘れっ。そのまま、そのまま……。

ワルターが叫ぶ。

——そうだ、バブ、がんばれバブ。

ダンも叫んだ。

スタートからゴールまでの迫力に、たしかにダンの若い血は騒いだ。若い血は、競馬にだけ騒いだのではなかった。いや、むしろ、ダンにとって一生の方向を支配した存在が、この叔父のところにいた。

それは、ワルターの娘グレイスであった。

ダンがグレイスといるとき、不思議な胸騒ぎと、幸福感に包まれている自分を知った。しかし、グレイスのダンに対する心遣いは、あくまでも従姉弟のものであり、ダンが焦れば焦るほど、グレイスは冷やかに感じられるのであった。事実グレイスは、ダンに対して、従姉弟として以外の何物も感じなかったし、ダンの思慕の念を知って、かえってからかうような素振りさえ示すようになった。

ダンにとって、ワルターの家での日々は、次第に苦しいものになっていった。

ワルターはダンの気持ちにまったく気づかなかった。ワルター夫人は、半ば迷惑のような感情を見

せるようになってきた。気がまぎれるはずの競馬場の喧騒けんそうの中でさえも、ダンは次第々々に孤独になつていったのである。

ふとつているワルター叔父は、寒いときでも汗をかいて興奮に酔つた。ダンもたしかに、同じような興奮の中にひたつたことが何度かあった。自分の手がけた仔馬が立派な競走馬になり、レースで他馬を負かす快感は、叔父が言うほどではないにしても相当な代物であつた。

——少し別の動物たちのほうも勉強してみたいんです。

と、ダンがワルターに申し出たとき、叔父は、しばらく、目を見開いたままでいた。

——なぜだエディー、なぜだ？

うなつていたワルターは、

——ケンタッキー・ダービーも、もうすぐ開かれようとしている。それまで、わしを助けてくれな
いか。

ついにアメリカの競馬も、エプソム・ダービーの形式を真似るまでに至つたのである。なんとかして甥おこを翻意はんいさせようとした。

グレイスから受けた心の痛手いたでを、その父に言うことはできない。これは自分とグレイスだけの問題である。

ワルターは、やがて、ダンの両肩を包むようにすると、

——また、お前の病気がはじまつたな。

あやすような態度になつた。

——はい。だから、どうか許してください。

叔父のもとを離れてから、ダンいは父の手助けをしていたが、一つのチャンスから従兄弟いとこのアレン・

W・サーマンと共同で牧畜業を始めた。アレンの父は、W・S・サーマン上院議員である。

二人は、だれはばかりのことのない野外生活を満喫した。思いきり仕事もした。

平野には、ウズラが群れ、森にはエリマキ雷鳥や七面鳥が走り、頭に真紅の冠をいただいたカイナルが飛び交う。父たちの土地の大部分は、青草におおわれた処女地である。

——エディー、きみの将来の一番の目的はなんだい？

アレンは聞く。

——うそをつかないで生きることだろうな。アレン、きみは？

——ぼくは、合衆国のために働くことだ。

お互いの考えは、けっしてかみあわなかったが、不仲になるなどということとはなかった。二人は、兄弟同様に愛しあい、お互いを尊敬しあった。

アルバートに売った日本行きの牛たちは、八十頭とも父たちのものだが、それは二人の牛たちが、まだ充分に育っていなかったからである。

——もうすぐ、ああいう取引きもできるようになる。

アレンは、少し口惜しそうであった。

ダンは、そんなアレンに言い残して、出て来た。

——アレン、ちょっとシカゴまで行ってくる。いったん帰ってくるが、もしかしたら、オマハぐらゐまでは同乗しなければならなくなるだろう。

ホテルの窓の下に、働きに出る人々の姿がふえてきた。

昨夜からのわだかまりがとけず、ダンを、いつもの朝と違えていた。アルバートは、まだなにか言い残していることがありそうだ。それが、昨夜の自分の不安感とかなかなか結びつかない。

朝が、いつもと同じようにすばらしいだけに、いっそういらだちがひろがっていく。

そんな感情を押し込んだまま、ダンはロビーに降りて行った。アルバートが手をあげた。

「じつはきみに、もう一つ頼みたいことがあった。ゆうべ言おうと思ったが、言いそびれてね」
ダンが真向いに坐るやいなや、アルバートはすぐに口を開いた。

「エディー、きみは日本へ行く気はないかね」

「えっ、日本へですって？」

不安といらだちの本体は、このことであつたのか。

「そうだ、日本へだ」

「家畜たちを運ぶためでしょうか」

それなら、サンフランシスコの港に、希望者がたくさんいるだろう。

「そうではない」

「……………」

「わたしは父から、シェルトンの代りを見つけるようにもいわれているのだよ」

「……………」

「ホツカイドウのことは、ゆうべ話したな」

「はい、聞きました」

ダンは答えたが、頭の中に入れたわけではない。

「シェルトンは、父の下で、日本政府の新しい仕事の農業担当をしていた」

「……………」

「ところが彼は不適格と判断されて解雇されたのだ」

アルバートは、ダンの顔をじっと見た。

ダンは、目をそらさないままで答えた。

「ぼくには関係のないことです」